あおもり 町連だより

第224号

令和５年１月発行

青森市町会連合会
〒030-0801 青森市新町一丁目3-7
TEL 017(734)2584
FAX 017(734)2587

明日への希望　陸奥湾の朝焼け　　撮影：写真　芦名　公雄氏（県写連　顧問）

謹賀新年

住みよい地域づくり推進
青森市町会連合会　会長　佐々木　重　光

新年あけましておめでとうございます。

地域町会長並びに町会員の皆様には、希望に満ちた輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、日頃より町会連合会の事業運営に格別のご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

青森市町会連合会では、ＩＴ元年の位置付けと共に健全運営を目指し組織改革を進めており、地域町会への可視化を目指しております。

今後ともより一層のご理解とご協力をお願い申し上げるとともに、各町会の益々の発展を祈念し新年のあいさつとします。

定時総会　５月30日

青森市町会連合会は令和５年度定時総会を５月30日（火）午後１時からホテル青森で開催します。

市長が「防災」説く

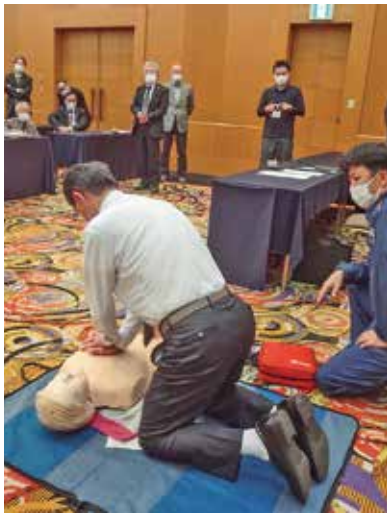
３年ぶり町内女性の集い

小野寺晃彦市長を講師に招き11月28日、町連女性部会は第43回町内女性の集いを男女共同参画プラザで開きました。コロナ禍のため参加者を限定し、感染対策を徹底することで３年ぶりの開催にこぎつけ、各町会から48名が参加しました＝**写真**。

テーマは「女性の視点からの青森市の防災」。小野寺市長は、おりよく荒川中学校の校区で実施した避難所訓練のもようを紹介。

女性や子ども、高齢者、障がい者が安心して過ごせるように、避難所をそれぞれのゾーンに分けるという「ゾーニング」が必要なこと。段ボールのベッド、授乳用、ファミリー用、トイレなどプライバシーに配慮したテント設置など、かつては考えられなかった避難所が当たり前になると話し、青森市が他市に先駆けて整備していることを説明しました。

「災害に強い青森市」を実現するためにも女性の力が必要で、家庭や町会で日ごろから防災を呼びかけてほしい、と話しました。



理事研修会も防災

心臓マッサージを体験

全国各地で豪雨や土砂崩れなどの災害が多発しています。「日常生活における防災」をテーマにした理事研修会が11月24日、アップルパレス青森で開かれました。

講師は市総務部危機管理課と消防本部警防課が務めました。

このうち救命・救急については、市内の救急車だけで一日30件も出動しており、「119番」電話を掛けたとき、慌てず、落ち着いて話してもらえれば、的確な対応ができるそうです。そして救急車が到着するまでにやれることとして、理事たちは心肺蘇生（心臓マッサージ）の体験指導（警防課）を受けました＝**写真**。

除排雪で市に要望

災害級の豪雪続き対策

市の除排雪事業説明会が11月10日、柳川庁舎で開かれました。

市からは①昨冬が２年連続、しかも災害級の豪雪に見舞われ、除排雪の経費が過去最大の約58億９千万円（２年度は約44億３千万円）に上った②低温が続いたため融雪が進まず、作業効率が悪くなった③労務単価の上昇が見込まれる―などと報告。

またこれに先立ち、町連と市の除排雪事業に関する意見交換会が10月に開かれました。

佐々木重光会長ら町連からは「苦情件数が若干減ったが町連のホームページを活用するなど、除排雪のパトロールや出動などの情報を市民に迅速に伝えれば、もっと減る。“見える化”を」「ドカ雪から３日以内の除排雪を」「空き家の屋根雪があちこちで問題になっている。どこにお願いしたらいいのか」「ライブカメラが除排雪の効率化に威力を発揮したようだ。もっと増設を」など要望や質問が続きました。

青森市表彰に４氏

青森市は令和４年度、多年にわたり町会長として市政に協力し著しい功績があったとして次の４氏を表彰しました。（敬称略）

舘山　一弘（茶屋町南町会長）
奥山　　茂（出町第二町会長）
鳴海　孝仁（八ツ橋ニュータウン町会長）
山下　　勝（サンヒルズ前町会長）

西部第四区連合町会

会長　岩淵　壽滿
（稲元第三町会　町会長）

当連合町会は、その名の通り青森市の西側にある20町会、6,033世帯で構成されており、地区内には世界遺産の三内丸山縄文遺跡もあり、たくさんの観光客が訪れる地区でもあります。

あんずまし三内

地区内では、地域住民が安全で安心して暮らせるようにと、種々なボランティア団体があります。それらの中から「あんずまし三内地域の会」について、会長である三内第一町会町会長の木立精一さんに紹介してもらいます。

当会は平成24年３月に「三内地域計画」を策定し、まちづくりビジョンとして「歴史、自然を次世代につなげる思いやりあるまち三内」を掲げ、「文化を語り継ぎ自然を大切にするまちづくり」「つながりを大切にみんなで楽しくまちづくり」「子どもとお年寄りにやさしいまちづくり」「地域の魅力を活かしたにぎわいと元気あふれるまちづくり」などをスローガンにしています。

広がる活動の場

この計画に沿って三内中学校区を活動区域に市のモデル事業として、地域住民、町会、子ども会やPTA等関係団体の協力を得て事業を展開。平成26年度からは、西部第四区連合町会の区域に活動の場を広げてきました。

これまで①高齢者への反射材リストバンド配布②安心安全マップ作成③災害時避難場所看板設置④西地区近隣校防災キャンプ（写真上）⑤防災リーダー研修会（写真中）⑥三内丸山周辺と沖館川のクリーン大作戦⑦ヨガ教室⑧３Ｂ体操⑨ノルディック・ウォーク（写真下）⑩縄文遺跡群世界文化遺産登録おめでとう音楽祭―などを実施しています。

未来の子どもたちへ

私たちの住む三内地域は、歴史、文化的施設等に恵まれており、交通の利便性に優れ、自然環境にも恵まれた過ごしやすい地域です。

私たちは今の子どもたち、さらには未来の子どもたちが、愛着を深めることができるように、より良い姿で引き継いでいきたいと思っています。

ホームページをご覧ください

青森市町会連合会のホームページは町会の広報紙も掲載しています。パソコンでもスマートフォンでもご利用いただけます。
アドレスは次の通りです。
https://aomori-choukairen.jp

下記QRコードからもアクセスできます

訃　報

東部第11区：桂町会
町会長　松田　功　殿
令和４年11月12日ご逝去

いにしえの「地名」「通り」を知ろう　藩政時代編⑥

「石江」をさかのぼる

工藤　大輔編集委員
（市民図書館歴史資料室長）

昭和61年11月1日　開業初日の新青森駅（石江字高間）
（青森市広報広聴課所蔵）

「江渡村」が誕生した時代

昨年、令和３年（2021）は廃藩置県から150年、すなわち青森町（市）が県庁所在地になって150年目の節目の年でした。

この大きな時代のうねりのなか、現在の青森市域にひとつの村が誕生しました。それが「江渡村」です。ただ、数年で江渡村の名称はなくなってしまいます。しかし、現在この村名の名残を、青森市西部の大字「石江」の「江」字に偲ぶことができます。

新道工事と江渡茂吉の移住

明治３年（1870）８月、弘前藩庁は新城村と青森町とを結ぶ道路開削に着手します。これを石神野新道といいます。

そして閏10月、新道の中央部に新しい村をつくることになり、「村立見込ノ期」までは負担（税）を免除するという条件で移住者を募ることにしました。

しかし、すぐに移住に応じる者はいなかったようです。募集が始まった明治３年閏10月をグレゴリオ暦に換算すると、1870年11月下旬～12月下旬に相当します。まさに冬、この時期の移住は躊躇われるものがあったのでしょう。

そうしたなか、青森米町の江渡茂吉という人物が移住を決意します。年代は明治３年とみられる閏10月23日付の文書で、彼が初めての移住者であるので、そこを江渡村と呼ぶようにと申し付けられていることが分かります。

江渡村存続の危機

江渡茂吉が移住をしてから９か月ほどが経った明治４年７月、廃藩置県が断行され弘前藩はなくなり、弘前県となります。茂吉はこの弘前県から「江渡村庄屋」を申し付けられています。

ところが、４年後の明治８年、江渡村が存続の危機に直面します。この年から本格化する地租改正に併せて、江渡村と隣村石神村との合併が取り沙汰されるのでした。江渡村の生産力では、一村として耐えられないと県当局から判断されたのかもしれません。

しかし、茂吉はこれを拒否し、あくまで「一村立」を願い出ます。これに対して第一大区長の笹森清敏は江渡の気持ちを汲み、石神・江渡両村から一文字ずつ取って村名を「石江村」改称して合併すべきことを県に上げています。

「石江村」はいつから？

こうした経緯を経て、石江村は誕生します。その時期は、明治８年が通説のようですが、私は明治９年３月以降とみています。

明治天皇御休跡碑
（中央市民センター石江分館脇）
明治14年の明治天皇巡幸の際、江渡茂吉は私費で御休所を作ったといいます。